

「島原／天草」の乱、その実態と言説

——「南有明海の叛乱」として考える

荒野泰典

「談合島」からの眺め

島原半島の東海岸には、海縁を縫うように、国道二五一号と島原鉄道が走っている。車で二五一号を南下して、素麺で有名な有家の町を過ぎた辺りから、道はすこし海から離れて、人家や田んぼの間を走り、北有馬町を過ぎ、南有馬町に入る。すると左手の、国道よりかなり低くなった田んぼの向こうに、小高い丘のような連なりが見えてくる。これが、日本史の教科書ではかならず登場する、「島原・天草の乱」（あるいは、「天草・島原の乱」、以下「乱」と表記）の後半戦の舞台になった、原城跡だ。

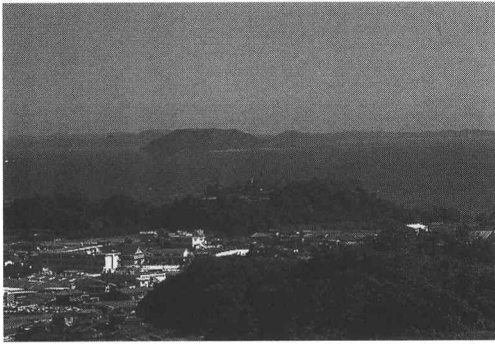


写真1 原城本丸と湯島（石井他2000）

原城は南有明海に突き出した段丘の上にある（写真1参照）。かつては、陸から離れた島だったかもしれない。海側から見ると、その部分は海面から一気に立ち上がり、特に本丸の部分はほとんど垂直に切り立った絶壁になっていて、船で近づくのも容易ではない（写真2参照）。本丸跡に立って見ると、南から西・北にかけては大江や浦田、有家の集落、その向こうに雲仙の噴煙、東には南有明海とその向こうに横たわる、熊本県の大矢野島や三角半島、天草の島々が見える。本丸跡の東の海上のちょうど大矢野島の中間辺り、まさに指呼の間に、平底のお椀を伏せたような島が、ぽつんと浮かんでいるのが見える（写真1・図1参照）。これが湯島で、「乱」の首謀者たちが蜂起前にこの島に集まり、その段取りなどについて談合したと伝えられている



写真2 海から見た原城本丸

ことから、「談合島」と呼ばれている。

この島に初めて渡ったのは、今から一一年前の一九九六年一月三日だった。現在の立教大学文学部史学科は日本史学・世界史学・超域学の三専修で構成されているが、二年前までは日本史・西洋史・東洋史・地理の四つのコースから成っていた。その日本史コースでは、大学での勉強の他に、「日本史実習」と称して、毎年、古代・中世・近世・近現代の四つのゼミごとに、実習地を設定して、史料調査とフィールドワークを実施していた。私の担当する近世史ゼミで一九九六年から実習のテーマに選んだのが、近世の初めに島原・天草地域で起こった「乱」（二六三七年一〇月―翌年三月）で、それから四年間この地域に通うことになった（荒野編、一九九八、一九九九）。先述の一一月三日は、この

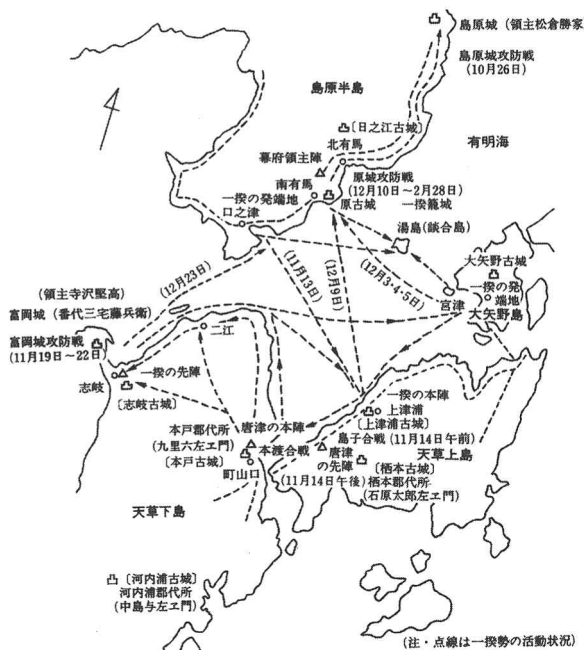


図1 一揆勢の活動状況 (鶴田文史1990 をもとに作成)

実習で私が、院生・学生諸君とともに、この島に足を踏み入れた最初の日だった。

実習の準備作業のうち、調査先を決めるために学生諸君に行きたいと思う場所を挙げさせるという手続きがあった。それぞれに候補地が挙げられていく中で、遠慮がちに、「談合島」をあげる男子

学生がいた。実は、私もこの島のことは以前から気になっていた。しかしここは教師から言い出すべき場面ではなかったから、我慢していたのだが、渡りに船で、この島を調査ルートに組みこんだ。その学生を中心に「湯島」グループを作り、この島の概要から渡航手段まで調べてもらうことにした。

この島の集落は、南側の港の周辺に密集していて、他の地区に人家はない。お椀を伏せたような形のために、海辺に平地はいたって少なく、耕地は、細い急な道を登った島の頂上に広がっている。思いの外そこは広く、この島名産の野菜や花などは、ここで栽培されるらしかった。ちなみにこの島の主産業は漁業で、太刀魚・蛸・鯛・鳥賊などが主なものだというのが、翌年（一九九七）にこの島に泊まった折には、夜釣りで子鰯がおもしろいように釣れた。宿のおばさんに手ほどきしてもらった女子学生が、それを手で捌き、翌日唐揚げにもらったのだが、そのおいしさは格別だった。

それはさておき、初めてこの島に渡った日に私たちは、息を切らせながら麓から頂上に行った。島原半島方面を見ようと思ったが、そちらは木が茂っていて見えない。展望台も試してみたが、木々よりも背が低くてあまり役に立たない。ふとその横を見ると、給水塔が立っており、その頭は木立の上に出ている。周りを見て、人影がないのを確認して、「立ち入り禁止」という札の横をすり抜けて、テッペンに登った。そ

ここからは、島原半島から天草上・下島、さらに、三角半島辺りまで見渡せる。もちろん、雲仙普賢岳の偉容も噴煙も、すぐそこに見える。しかし、島原は見えない。その景色に感動して見渡しているうちに、ふと、ここから見える地域の人たちが「乱」に立ち上がったのだ、ということに気がついた。つまり、ここから見える地域の人たちがともに手を携えて立ち上がったわけは、この地域の人々はこの海（南有明海）を介して日常的に行き来する関係にあった、つまり、南有明海を媒介にして生活圈を共有していた。おそらく湯島はこの海域の要石の位置にあり、この島が「談合島」になる理由も、その立地条件にあった。この二・三日、「乱」に関わった有明海沿岸の地域をめぐりながら、ほとんどいつも海上には「談合島」が見えていることは意識しながら、なぜ島原と天草の人たちがともに「乱」に立ちがたったのだろうか、と話し合っていた。その意味が、湯島の水道塔の上からの眺めで一気に解けたように思った。

なぜ、今、「島原／天草の乱」か

本題に入る前に、とりあえず、私が「島原／天草の乱」に注目するようになった理

由を説明しておこう。私は、いわゆる「鎖国」論の批判から始めて、近世の国際関係の脱構築の作業を進めてきている。一六三七年から翌年の三八年にかけて、九州の島原・天草地域で起きた地域住民を中心とする大規模な叛乱（乱）は、大まかに分けて、以下の三つの観点から研究・叙述されてきたと言つていいだろう。

(1) これをキリシタン一揆（叛乱）とし、一揆勢の原城への籠城は「殉教」、この「乱」全体を南蛮・キリシタン時代の最後の輝き、とする。

(2) これをきっかけに幕府はポルトガルとの断交に踏み切つたと考えられていることから、「鎖国」への重要な契機となつたとする。

(3) 領主の「苛政」に対する農民一揆（叛乱）とし、同時期の大飢饉とセットでとらえ、幕府の政策（農政）の転換の契機とする。

上記の三つの観点は、かならずしも互いに対立するものではないが、いずれも「鎖国」ということを前提に、それとの関係性においてこの「乱」を考察するという点では、共通している。しかし、「鎖国」観を批判するのであれば、この「乱」についても、その立場からあらためて検討を加える必要があるだろう。私がこの「乱」をとりあげ

ることにしたのは、このように、いたって単純な動機による。

こうして、日本史実習のテーマを「乱」とし、フィールドを島原・天草地域に設定し、一九九六年から四年間、そのようにして学生・院生諸君と島原・天草地域に足を運び、冒頭で述べた「南有明海域」をはじめとする、いくつかの発見をした。折から原城の発掘が始まっており、新たな発見が相次いでいたということも追い風になった。それらにもとづく「乱」の再構成の試みが、以下に述べる報告である。

「島原／天草の乱」の意味

もう一つ、本題に入る前に、「島原／天草の乱」の「／」という表記の理由について、説明しておこう。現地を歩いて痛感するのは、この「乱」をどのように呼ぶか、ということの判断の難しさだった。島原地方では「島原・天草」と島原を先に置き、逆に、天草地域では「天草・島原」と呼ぶ。一九九六年に日本史実習でこの地域を訪れて以来私たちにつきまとい続けたのが、この「乱」をどう呼ぶか、つまり、島原を先にするか、天草を先にするか、という問題だった。それは、歴史の教科書にはかならず出

てくるほど有名な歴史的事件であるこの「乱」の主導権を、二つの地域のどちらが握るかという、きわめて現代的な問題にも関わっている。

過密化する主要都市を除いて、日本の地域のほとんどは過疎と財政難とに苦しみ、多くの場合は、地域おこし（村おこし・町おこし）の手段に観光を選び、この「乱」のように全国の歴史的事件は、そのためのまたとない目玉となる。つまり、観光の目玉である「乱」をめぐる「本家争い」が、この呼び方をめぐる軋轢には込められている。これが、私が感じとった、「乱」に関わった地域の嗤^{わら}えない現実なのだった。

しかし、次に述べるように、この「乱」の特徴の一つは、島原と天草の人々がともに手を携えて立ち上がったところにある。つまり、私の表題の「／」の意味は、島原か天草かという二者択一ではなく、どちらでもあるところにある。なぜならば、冒頭に述べたように、「乱」に立ち上がった人々は、「南有明海域」という海を媒介にした地域を共有する人々だった、と私は考えるからだ。この「乱」を全国区にしたエネルギーの根源の一つは、この地域の人々の結びつきそのもののなかにあるのではないか。じつは、この海域の現代における再生も、県・市・町村という行政区画に分断されたこの地域、ネットワークの再構築のなかにこそあるのではないか、とも私は考える。以下はそれを検証する試みの一つである。

「南有明海域の叛乱」ということ

まずこの「乱」の性格だが、領主の苛政に対する抗議の蜂起が、幕藩連合軍の攻撃を受けて、幕藩権力に対する全面戦争の様相を呈するにいたったもの、と私は考える。「乱」が、当初からキシシタン一揆の様相を呈するのは、この地域が長いキシシタンの伝統を持ち、蜂起した人々の結集の紐帯として最も顕著に現れているのが、キリスト教だったからだ。「乱」を指導したとされている「益(増)田(天草)四郎」(以下、「天草四郎」を用いる)と彼を祭り上げた一派の存在も、その印象を強めている。また、その原因になった領主(松倉・寺沢)の苛斂誅^{かれんちゅうさう}求も、キシシタン地域だからいつそう厳しくなり、さらに、転宗を強制するための弾圧も、強制される側にとっては、「苛政」以外のなものでもなかった。したがって、キシシタン弾圧と「可政」は密接に関連しあっており、近代人の私たちが考えるほど簡単に分けられるものでもない。従って、あえて性格づけをすれば、キリスト教一揆の性格を帯びた農民反乱ということになる。しかし、幕藩側は当初からキシシタン一揆と受け止めて、対処した。

「乱」は、島原・天草地域の領主(島原藩・唐津藩)の、キシシタン弾圧をふくむ「苛政」

と一六三三年（寛永十）頃から続く飢饉に加えて、島原藩主の代替わりが重なったために起きた。島原・天草両地域が呼応して蜂起したのは、この地域が南有明海を媒介にして地縁・血縁でつながって、一つの海域世界を形成していたからだと思われる。私には、島原半島の南目（「乱」参加地域）と北目（不参加地域）の「乱」へ態度の違いを、小農自立の程度にもとづく村落構造の違いに求める議論（中村、一九七五）が成功しているとは思えない。

南有明海のほぼ中心に、首謀者たちが蜂起の前にひそかに集まって談合したと伝えられる湯島（談合島）がある。冒頭で述べたように、その頂上に立ってみると、そこから見渡せる、島原から天草にかけての地域の村々が立ち上がったことに気がつく（図2・3参照）。もちろん、例外もあるが、それらについては、それぞれの村の個別の事情を調査する必要がある（今後の課題としておこう）。そこから見ると、島原半島の南目は視野の内だが、島原をふくむ北目は見えない。北目と南目で「乱」に対する姿勢がほぼ一八〇度違うのは、おそらく生活圏が違っていて、日常的なつながりが希薄だったからだと思われる。聞き書きの結果、現在でも湯島の人は島原から北には漁に行かないということも明らかになっている。

湯島はこの海域、すなわち、南有明海域の要の位置にあり、おそらく、この海域の

図2 島原村々の一揆参加状況
(藤野1995をもとに作成)

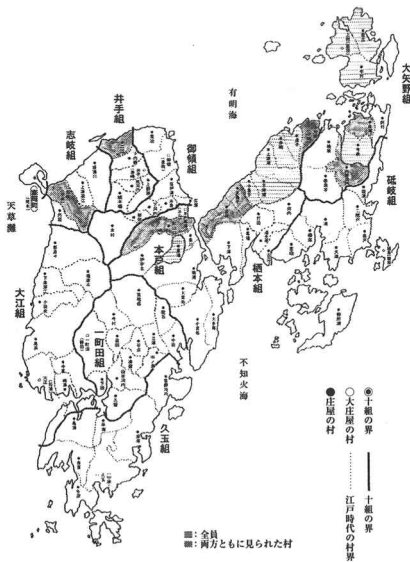
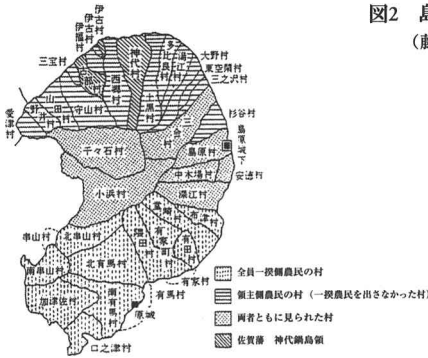


図3 天草村々の一揆参加状況
(福田1997をもとに作成)

人々の潮待ち・風待ちの島であり、両岸の人々が日常的に出会う場でもあった。湯島が談合島になる理由もここにあった。一揆に立ち上がった人々は、自分たちの「庭」であるこの海域を縦横に走り回って、戦いを展開した(図1参照)。これらのことから私は、この「乱」を「南有明海域の反乱」と呼びたい。

「乱」二段階説

しかし、彼らのキリスト教も、指導者（宣教師）不在の時を経て、かなり日本化していた。「乱」の結集の核だった天草四郎を「天人」として、あたかもキリストその人のように祭あげたことや、彼らの蜂起は、正統なキリスト教から見れば、「誤った終末観」にもとづくものということになるのだろうか（海老沢、一九八八）、むしろ、「誤った」、つまり、正統から外れたからこそ彼らの結集の紐帯となりえたと考えるべきなのではないだろうか。

四郎を中心とした「乱」の指導者たちはキリシタンであり、その独特な終末観にもとづいて蜂起を準備し、「乱」にまとめ上げて行ったのだが、参加者の中には、強制的に参加させられた、いわゆる「むりなりのもの」もいて、全員がキリスト教でまとまっていたわけではない。また、指導者層も一枚岩だったわけではない。「乱」の裏切り者としてただ一人生き残ったと伝えられる山田右衛門作も、指導者層の内の反主流派の一人だった。

「乱」が、幕府の上使が下向するとの情報を得て、ただちに原城にこもったのは、戦

国時代以来の、抗議や自衛の行動の一つである「籠る」作法に則ったものだったと考えられる（藤木、一九九七）。彼らのつもりでは、敵対したのは、直接の領主である松倉氏や寺沢氏であって、彼らが幕藩軍に放った矢文などを見るかぎり、將軍権力には、彼らと領主の紛争を調停する役割を期待していたように見える（もちろん、それも複数の路線の内の一つ、とも考えられる）。幕府の上使の指揮する幕藩連合軍に、問答無用で攻めかかられた時に、彼らの戦いは、やむなく、幕藩権力に対する全面戦争に変わっていった。つまり私は、この「乱」が幕藩軍の原城攻囲の前後で性格を変える、と考えており、これを仮に「乱」二段階説と呼ぶことにする。

籠城軍からは、意外に多くの落人が出たと思われる。また、陥落の際に城にいた者すべてが殲滅されたというのも、多分に攻城に参加した大名たちのタテマエがふくまれている可能性がある。最後の総攻撃の折には、盛んに人狩りが行われた形跡がある。大名軍が、何千人もの戦利品を引き連れて本領に戻る途中で、幕府上使からの指令で、やむなくその場で彼らを切り殺したとの伝承を持つ塚が今でも残っている。籠城側が全滅させられたというのは、実態というよりは（もちろん、実態も十分悲惨だったのだが）、当初から幕藩権力側がこの「乱」をキリシタン一揆と決めつけたのと同様の意味で、「全滅」させたというと言説が必要だったからだろう。

「乱」の鎮圧に参加した諸大名には恩賞はなく、最後の総攻撃の折に抜け駆けをし、軍令に違反したとして、鍋島勝重と、その陣に軍監ぐんかんとしてつけられていた長崎奉行さかきばらもとなお榊原職直も、閉門に処せられた。抜け駆けは、かつては、いわば武士としての「嗜」たしなみを誇示する行為でもあったのだが、この段階になると、むしろ、軍令を守り、軍の規律を乱さないことが求められる時代になったのだった。閉門に処せられた鍋島邸の門前で、上述の大久保忠教が、時代の変化を嘆く言葉を投げかけたというのは、いかにもできすぎだが、そのような戦のあり方の変化は、総司令官の信綱が、一旗あげるために参戦した牢人たちや、参戦しなかった諸大名から派遣された使者たちを喜ばず、冷遇したことにも、表れている。「乱」は彼ら「一旗組」にとって最後の戦場だったが、彼らが本領を発揮する場は、すでに著しく狭められていたのだった。

国内の平和と「百姓成り立ち」

「乱」が国際政治に与えた影響は次にまとめることにして、ここでは国内政治におよぼした影響を整理する（荒野、二〇〇三）。

第一に、先の武家諸法度の項で触れたように、非常時の大名たちの行動規制(第四條)と、大船建造の禁止を「商売船」については除外するなど、一定の手直しがされた。これは、大名統制よりも民政を優先させるといふ姿勢の現れであり、次に見る、大飢饉への対応に共通するものだ(朝尾、一九七五b)。

第二に、幕府の年寄松平信綱が上使として譜代・外様一二万五千人の連合軍を指揮し、鎮圧に成功したことにより、「公儀」権力の威信が著しく高まった。「公儀」権力を、将軍と直臣を軸に、万石以上の大名が結集して構成する国家権力と定義すると、今回はまさに「公儀」の戦争であり、それを通じて諸大名の「公儀」への結集度は高まった。そのもとで、大名における譜代・外様の区別が希薄化し、周知のように、一六四二年(寛永十九)には譜代大名にも参勤交代が義務づけられ、全大名の約半数が常に江戸に詰めるという体制ができあがった(朝尾、一九七五b)。それは、大規模なお手伝い普請の時代の終わりを意味していたが、参勤交代の制度化はその代替物だったということもできる。

第三に、松平信綱ら側近の活躍は、内外の大名を心服させ、「公儀」と将軍の威信を高め、「公儀」内部の、信綱ら家光側近の威信を増大させた。それを機に、秀忠以来の年寄土井利勝・酒井忠勝を老中からはずし、信綱ら側近を老中に据えた。そして、

一六三五年（寛永十二）の將軍直轄の職制を改め、「六人衆」以外の、留守居・寺社奉行・町奉行・大目付・作事奉行・勘定奉行などを老中の支配下に移し、將軍―老中―諸職というピラミッド型の組織に再編した。以後これが、幕政機構の基本形となった（藤井、一九九二）。

第四に、キリスト教邪教觀が決定的になった。原城陥落時に、集められた籠城側の首だけでも一万九千余、それに対し幕藩軍も死傷者八千人余と伝えられる（山本、一九八九）。各藩が派遣した兵・夫も、幕府の規定の数倍におよび、幕府からは規定に応じた扶持米が支給されたものの、実際にかかった費用はその数倍と試算されている。鎮庄に参戦した諸大名の経済的負担と人的損害は大きかったにもかかわらず、従来の戦争と違って、恩賞などの見返りはなかった。その代わりに世の中を惑わす邪教としてのキリスト教觀が、領主階級のみならず、社会全般に浸透することになった（伊東、一九三五）。

第五に、キリシタン探索が本格的に開始された。一六三八年（寛永十五）九月、家光は、キリシタンのいっそうの摘発と、「訴人」（訴え出た者）に褒美を与えることを全国の大名に伝え、幕領にもその旨を命じる高札を立てさせた。この時の褒美は、バテレンには銀子二百枚、イルマン百枚、キリシタン（一般の宗徒）五十枚から三十枚、訴人

はたとえキリシタンでも、「転ぶ」(棄教する)者はその咎を許すとしている。この訴人制度は、バテレンに関しては、一六一七年(元和三)から始まり、一六三三年(寛永十)には家光が長崎奉行に示した施政方針(かつて「第一次鎖国令」などと呼ばれた「条々」、後述)で、イルマン以下にも適用され、今回で褒賞銀が増額されるとともに、対象が一気に全国に広げられた(岩生、一九六九)。幕領と同じく、大名領内でもくまなく高札が立てられるようになるのは、家光から家綱に代替わりした後の、一六五四年(承応三)のことになる(藤井、一九九二)。

この幕府の訴人褒賞制を梃子に、一六四〇年から一六五〇年代にかけて、宗門改役井上政重の指導のもとで、全国的にキリシタンの摘発がなされた。大橋は、岡山藩を事例に、この時期のキリシタン訴追の傾向と「被訴人」(訴えられた者)を検討し、被訴人には、いくつかの奉公先や様々な生業を経験し、地域的に広く移動した者が多かったことを検出した(大橋、二〇〇二)。これは、この時期の、都市における移動する日用層(吉田、一九九八)、農村における「走り者」(宮崎、一九九五)に見られるような、民衆の存在形態に根ざしたものであった。

なお、潜伏キリシタンには、このように移動する散在型と、農村部に定住しコンプレリアなどによって信仰を保持する集団型とがあった。この時期には幕府は、キリス

ト教の拡散を警戒して主に散在型の摘発に努めたが、一七世紀中期以降になると、集団型が集中的に摘発され（いわゆる「崩れ」）、それを契機に宗門改が制度化された。これらの「崩れ」は偶然に露見したのではなく、幕藩領主が、「乱」後にむしろキリシタンへの脅威を感じ、その訴追を執拗に続けた結果だった（大橋、二〇〇二）。

寛永の大飢饉と「土民仕置条々」

「乱」も、それ以前から続いていた凶作が原因の一つだったが、「乱」が終わった一六三八年（寛永十五）八月頃から九州一円に広がった牛疫（牛の病気）が、全国的な大飢饉の先触れだった。以下、全国的な飢饉状況と幕府の対策を、藤田覚の仕事によりながら、概観する（藤田、一九八二、八三、なお、高木、一九八八他）。この年の末には九州一円の牛はほぼ全滅し、翌年には中国・四国から近畿地方におよび、さらに翌一六四〇年には全国に流行した。その上に天候不順が重なり、各地で長雨による洪水や日照り、冷害や虫害なども出て、四一年（寛永十八）の秋には全国的な凶作であることが明らかになった。翌四二年からは飢饉が表面化し始めた。年初に百姓が食物に事

欠く藩が始め、三月から五月にかけて津軽ではおびただしい死人を出し、広島藩や備後三次藩でも餓死人が出、東北地方のみでなく、関東や信濃でも飢饉と言われるようになった。当初は作柄が例年よりいいと言われた地方もあったが、山城では七月から八月にかけて早魃、関東でも七月に日照り、八月には長雨と洪水、北国では八月に長雨、会津では大霜というように、天候不順が続いた。閏九月になると、北は津軽・南部から九州にいたるまで凶作が明らかとなり、二年続きの飢饉は避けがたくなった。

その年の末頃から飢人が各地に溢れ、道路には餓死者の死体が見られるようになった。江戸から京に至る北国筋の街道では、人馬の餓死体が路地を隙間なく埋めるといような状態だったという。江戸にも飢人が流入し、餓死人が出たが、京都では洛中・洛外に乞食が充満し、餓死者もはなはだ多かった。江戸の状況が他の地方と較べて比較的軽微だったのは、幕府が諸大名に兵糧米を江戸に廻送させる（江戸で兵糧米を調達させない）などの強権を發動して、米価を調節したためだろう。この時の飢饉は近世前期の最大のもので、全国で五万人、あるいは十万人ともいわれる餓死者を出した。幕府は一六四二年春には全国的な飢饉の状況を把握し、四月から五月にかけて、西国大名に帰国を命じ、宗門改めの強化とともに、凶作・飢饉への対策を指示した。次いで、地方知行の旗本に、知行地に赴いて凶作と飢饉対策を実施することを命じた。

さらに、譜代大名にも参勤交代を命じたが、直接には、凶作・飢饉対策でもあった（これによって、譜代大名の参勤交代が制度化されたことは、すでに述べた）。こうして、知行地を持つ全領主階級が、凶作・飢饉対策と勸農（農業環境を整え、奨励すること）を実施する態勢がとられた。

さらに、家光は、藤田が「飢饉奉行」と呼ぶ、老中と永井尚政（淀城主）や江戸町奉行ら七名からなる臨時の組織を作り、飢饉対策を評議し、全国の大名に通達することによって、全国民に幕府の飢饉法令を周知させる態勢をとった。それらの法令から次のような幕府の姿勢が読みとれる。すなわち、百姓（町人）に対しては、耕作出精・損毛以外の年貢皆納、村内の相互扶助、儉約など生活全般にわたる規制を命じ、領主・代官に対しては、年貢・夫役の一定の緩和、百姓に対する非分・非儀の禁止、小農維持のための勸農を命じている。単に幕領にとどまらず、全国の全階層を視野に入れた農政を展開しようとしていることがわかる（藤田、一九八二、八三）。

その集大成が一六四三年（寛永二十）の「土民仕置条々」一七箇条であり、百姓の生活全般にわたって儉約を奨め、耕作の出精と相互扶助を命じ、年貢収納をめぐる訴訟のルールを定めた。この法令で田畑永代売買を禁止しているのも、注目に値する。いわゆる「百姓成立」を軸に、百姓の日常生活と生産、および訴訟（政治的生活）を規制

しようとするもので、当面の飢饉対策であると同時に、その後の幕府農政の基本ともなった（高木、一九八八、藤井、一九九二）。

「乱」とポルトガル船の来航禁止

ここでは、「乱」がその後の国際関係に与えた影響について整理する（荒野、二〇〇三）。

第一に、この乱の幕府への第一報で、すでに「キリシタン」一揆として報告され、幕府をはじめ支配層がこの「乱」を、まず、キリシタンの一揆と受け止めた（以下、事実関係については、『原史料で綴る天草島原の乱』による）。これによってキリスト教邪教観が定着した。

第二に、幕府をはじめ支配層が心配したのは、この蜂起に呼応して不穏な動きや蜂起などが起きることだった。諸大名は領内でキリシタンを中心とした一揆などの不穏な動きが発生することを恐れ、幕府は、国内では、特に長崎市民の動向に気を配り、国外では、マカオ・ポルトガルとの連携を警戒していた。長崎には大村藩が警固に当

たった。四郎らは当初長崎に向かおうとしており、一揆側の思いも同じだったようだ。「乱」鎮圧後には総大将とされた天草四郎他の首数千が晒された（それらの首はその後首塚に収められた）ということが、幕府側の警戒心の深さを示している。

しかし、「もう一つの本命」マカオには、一揆に呼応しようとするような動きはみられない。この年のガリオット船が長崎を出帆した後、恒例の江戸参府をしたカピタン・モール、ドン・フランシスコ・カステロ・ブランコは、運悪く「乱」に重なったために、謁見を許されず、かろうじて贈物は受領されたものの、ただちに長崎に戻るように命じられた。一六三八年二月、小船で長崎に着くと彼は、足が地につかず、誰とも話しができないように「蔽いをした乗物」^{イリミ}に乗せられて、彼の宿所に運ばれた（後に、出島に移され、翌年まで抑留）。明らかに罪人のあつかいだ。しかし、ポルトガル・イエズス会の立場は、「乱」とは無関係ということだったようだ。乱の当時捕えられて大村の牢に居りながら、できるだけ情報を集めてマカオに送ったポルトガル人イルマン、ドアルテ・コレアは、あくまで「乱」を苛政に対する農民反乱と見ており、「乱」に対するそれ以上の同情は見られない（ドアルテ・コレア島原一揆報告書）。しかし、それだけでは幕府のマカオ・ポルトガルに対する疑いは解けなかった。あるいは、幕府は疑いを解こうとはしなかった。

第三に、オランダ連合会社が原城攻撃に参加した。籠城した叛乱軍からは嘲られ、味方の細川忠利からも「日本の恥辱」と批判されたが、幕藩軍の総大将松平信綱の考えは違っていた。「南蛮船」の援軍を期待している籠城軍に、「南蛮船」(実は紅毛船)に攻撃させて気落ちさせることを狙ったのだという。それはまた、彼らの幕府への忠誠心を試すものでもあった。その意味では、この「乱」は、日本市場への残留をめぐる熾烈な競争をしてきた諸勢力の、最後の課題でもあった。その結果、「オランダ人は好運を得」、「ポルトガル人の境遇は悪化」した。華人(中国人)も、持てる技術で城攻めに参加して、忠誠を示した。

第四に、この乱を期に、幕府はポルトガル船の追放を最終的に決意した。幕府はすでに一六三五年(寛永十二)頃からポルトガル船の追放を決めていたようだが、最終的には、幕府年寄衆全員と商館長フランソワ・カロンとの質疑応答によって、以下のことを確認した上で決定された。まず、ポルトガル人の追放後もオランダは、スペイン・ポルトガルの妨害を受けずに日本に來航でき、かつ、ポルトガル人のように、生糸・絹織物、薬種などが供給できること。次に、「シナ人」(華人)たちも今以上に來航するようになること(幕閣は、華人もポルトガル人によって來航を妨げられるようになると考えていた)。最後に、朱印船を復活しても、中国は日本船の渡航を許さず、東南アジア

方面に進出した朱印船は、ポルトガル船の日本来航に配慮する必要のなくなったポルトガル・スペインの容赦ない攻撃を受けるであろうこと。この件については、「我々は、他の人々^{人々}の奉仕を受けることができる限りは、日本が自身の船を国外に渡航させることを必要としない」という酒井忠勝の意見で決着がついた。徳川政権のシナ海域に對する政策の基本が交易ルートの確保にあったことは、これからも明らかだ。

また、年寄の一人阿部重次が、日本に来航する華人が、明の海禁のために、「総べて秘かに^{ひそ}、しかもこっそりと来なければならない」（密航者である）と同様に、華人からオランダ人が受け取る品物も同様の性格ではないかと質問したのに対して、カロンは、台湾に渡航する華人はすべて官憲の渡航許可証を交付されていると答えた。カロンの返答も周到だが、幕閣たちが、明の海禁をはじめ、当時の国際関係についての正確な理解にもとづいて政策を決定しようとしているのが、印象的だ。これらの議論は、華人、ポルトガル人、日本人によって作られた「様々な世界全圖 *verscheyde caeten der heele wereld*」と、カロンたちが一晩かかって作成したオランダから日本までの地図と陸地の投影図とを前にして交わされた（『オランダ商館長日記』訳文編四下、寛永十六年五月二十―二十三日条）。ポルトガル人の来航停止は、当時得られるかぎりのリアルな情報にもとづいて、オランダ人と華人によって、ポルトガル貿易が廃止された後を補填でき

るとの見通しを得た上で、決定されたのだった（永積、一九八一）。

沿岸警備体制の強化

そして翌年ポルトガル船来航の時期に合わせて上使太田資宗が派遣された。彼は江

戸を発つ前に、家光の御前で、以下四通の役目に関する覚書を渡された（「御触書寛保

集成」）。すなわち、①「かれうた御仕置之奉書」（ポルトガル船の来航禁止）、②「諸大名

へ被仰出浦々御仕置之奉書」（ポルトガル船の来航禁止と、領内に不審な船や異国船が漂着した

場合には、船中の人数を改め、上陸させずに長崎に送ること、不審なものを船に乗せてきて、ひそか

に上陸させるものがあれば訴え出ること）、③「唐船へ乗来族え相伝覚書」（宣教師やキリス

ト教徒を乗せて来ることの禁止）、④「阿蘭陀人え相伝之覚書」（同前）、である。同じ日に、

諸大名も江戸城に呼び出され、上記の①②をその場で読み上げた。これはそれまでと

はまったくちがう通達の仕方です、ポルトガル人への通達もふくめて、全大名に伝達さ

れた（ただし、東国大名に関しては②が、漂着の不審船・異国船を長崎送りではなく、「番をつけ、

注進する」となっている）。「かれうた」というのは、ポルトガルの小型帆船ガレオット

Galliot のことだ、この時期の日本では、ポルトガル船の代名詞のようになっていた（荒野、一九九九）。

さて、七百人もの大行列で長崎に到着した上使は、ポルトガル人に①（来航禁止）を、華人に③、オランダ人に④を、そして、あらかじめ集めておいた西国諸大名の奉行たち、②を通過した（永積、一九八一）。同じ頃江戸で、幕府は、細川・黒田など九州の有力大名に、異国船の来航は長崎・江戸に注進すること、長崎に家臣を置き、長崎奉行の命令に従うことなどを命じ、他の中小大名には、異国船来航に備えてそれぞれの領分を入念に監視するように命じた（山本、一九八九、九五）。これ以後、長崎奉行と周辺大名との連絡役として、いわゆる「長崎聞役」が諸藩から長崎に置かれるようになる。また、対馬・薩摩の両藩にも、ポルトガル船の来航禁止を告げるとともに、それぞれのルートで、中国産生糸・絹織物や菓種の輸入に努めるように命じていた（荒野、一九八八、上原、二〇〇一）。

翌一六四〇年ポルトガル特使ルイス・パチエロらが貿易再開を求めて長崎に来航した。幕府は上使として大目付加々爪忠澄かづねあきららを派遣した。上使は、キリスト教徒六一人の首を刎ね、彼らの所持品、家財などはすべて彼らの乗船とともに焼いた。そしてこの次第を報告させるために、非キリスト教徒である黒人らの水夫十三人に、マカオ

当局に対する「諭文」(教え諭す文書)を持たせて、唐船でマカオに帰した(『通航一覽』卷百八十三)。この経緯を記録したカロンは、「陛下の喜劇 *comédie van de Majesteit*」と呼んでいる。徳川幕府の「武威」を示すための強硬な措置をそのように譬えたのか、あるいは、宿敵ポルトガルの悲惨な運命をあえて喜劇と言うほど宿敵への恨みが深かったのだろうか。あるいは、カロンはこの事件に対する幕府の一連の対処に、「劇」としての性格を見抜いていたのかも知れない。

それとはともかく、この後上使たちは、九州と中国・四国の大名に今回の処置を知らせ、ポルトガル船の警戒のために、領内の内海上の見晴らしがいい場所に番の者を置くことを命じた。これを受けてポルトガル船をはじめ、異国船の来航を常時チェックするための「遠見番所」が設置された(山本、一九八九)。長崎に関しても、乱後の巡検で松平信綱が、野母半島の先端の権現山に遠見番所を置き、烽火山に烽火台を置くことを指示した。さらに、一六四一年(寛永十八)から、福岡藩が長崎港口の警固を命じられ、湾内の戸町・西泊に番所を建て、翌年から佐賀藩がこれに加わり、両藩が隔年で警備に当ることになった(荒野、一九八八)。こうして、日本に近づく異国船はすべてチェックされる沿岸警備体制が構築され、それは漂流民送還体制の基礎ともなっていく。

キリシタンとポルトガルの排除の体制は、長崎以外の三つの口においても、それぞ

れに強化された（山本、一九九五）。朝鮮に対しては、乱の鎮圧後すぐに朝鮮へその情報伝わり、ポルトガル船の来航を禁止した後には、対馬の宗氏を通じて、そのことを正式に伝えるとともに、あわせて、生糸や絹織物の貿易拡大を要請した。そして、一六四四年（正保元、仁祖二十二）には、キリシタンの流入防止への協力を要請し、朝鮮側も協力を表明した（田中、一九七五、申、二〇〇〇）。琉球口に対しても同様で、進貢貿易による生糸・絹織物輸入の確保と、キリシタン流入防止のための警護が強化され、「南蛮船」の漂着が多かった八重山諸島にまで番所が置かれた（上原、二〇〇一）。蝦夷地においても、かつてここは「日本」ではないと言った松前氏が、一六三九年には領内のキリシタン一〇六名を捕え、処刑している。こうして、国家領域を超えた、華夷秩序内の国と地域にも、キリシタンとポルトガルの排除がおよんだ。

ガレオット船の日本渡航が禁止されて以後、オランダ人に対する統制が一段と強化され、一六四一年（寛永十八）には商館が平戸から長崎に移されたこと、移転後は一段と管理が強化され、オランダ船の舶載生糸にも糸割符が適用されたことなどは省略して、ここではオランダ商館の移転には、急速に衰退する長崎の救済と、長崎市民に対する失ったポルトガル貿易の代償という側面があったことを、指摘するにとどめる。

「乱」とシナ海域交易ネットワークの再編

こうして、幕府による、長崎を基点とする東シナ海域の交易ネットワークの分断（朱印船・奉書船⇨日本人のシナ海域渡航とポルトガル・イスパニアの来航禁止など）と再編（唐船・オランダ船の長崎集中、薩摩・対馬・松前口の統制の強化）が進行した。それは、すでに見たように、国内政治の民生重視への舵切りと軌を一にしながら進められ、国内外の平和体制の構築に寄与することになった。それによって、一六四四年明清交代という東アジア地域全体を巻きこんだ大変動を、その影響を最小限に抑えこみつつ、乗り切るこ
とができたと考えられる。

しかし、その方向への舵切には、反対勢力の根強い抵抗が伴った。反対勢力は、幕府の外ばかりではなく、マカオと幕閣の強い結びつきに見られるように、幕府内部にも存在したと考えられる。その前にたじろぎためらっている幕府の背を押して、大きくその方向に踏み出させたのが「乱」だった。家光と彼をとりまく、松平信綱などの気鋭の幕閣たちは、そのことを十分意識しつつ行動し、かつ、この機会を存分に活用したのではないかと私は考えている。このようにしてキリスト教邪教教観は確定し、以

後人々を内と外から縛るキーワードの一つとなる。

言説としての「乱」

ここでは言説としての「乱」という論点に絞って、やや散漫になった叙述を締めくくりにしたい。

まず、家光Ⅱ幕府は第一報を受けた時から「乱」を「キリシタン一揆」と決めつけていたことに注目しよう。たしかに、周辺諸大名は軒並み幕府へ「キリシタン一揆」として報告しているから、幕府がそのように判断しても不思議はないと、一応は考えることができる。しかし、実態としては苛政に対する農民反乱とキリスト教徒の戦いという二つの要素が複雑に絡まった叛乱であり、かならずしも一方的にキリシタン一揆、あるいは叛乱ときめつけるべきものではないだろう。にもかかわらず、家光Ⅱ幕府は、性急にキリシタン一揆と決めつけ、殲滅の方針で臨んだ。そのことが、一方では幕藩軍の混乱を生み（例えば、上使板倉重昌の戦死など）、攻城戦を長引かせ、他方で、一揆勢を死に物狂いの抵抗に駆りたてることになって、一揆勢のみでなく、幕藩軍が

らも多大な死傷者を出すことになった。あまつさえ、近代になって、故のない(あるいは、一揆勢の多くが考えてもいなかったであろう)「殉教」説まで生むことになった。

一揆勢は、かならずしも、みずからの信仰を守るために立ち上がったのではなく、信仰を含めた、彼らの生活を守るために立ち上がったのだと、私は考える。苛政とキリスト教弾圧とを分けて考えるのは、近代的に過ぎるとも私は考える。一方幕府は、すでに述べたように、従来の政策、より具体的には、秀忠以来の政策で行き詰まり、政策転換の必要を痛感しながらも、それに踏み切れないでいた。そこに、突然、あるいは、おあつらえ向きに「乱」が起こり、幕府はそれを徹底的に弾圧しつつ、それを梃子にしながら、国際・国内の双方の政策に新機軸を打ち出していった。こうして、「乱」
Ⅱキリシタン一揆Ⅱ殲滅、という一連の図式を内包する言説が生まれた。これを仮に「原城言説」と呼ぶことにしよう。

しかし、一揆勢はかならずしも「全滅」させられたのではなかった。もちろん、幕府はその方針で臨んだはずだった。しかし、原城の発掘に当たっている南有馬町の松本慎二氏のお話によると、出てくる人骨は彼が想像するほど多くないという。彼の「想像」とは、様々な史料が語る、籠城した一揆勢の一万から三万以上までの幅のある人数にもとづくものだが、史料の語るもつとも少ない一万という数にもはるかに及ばな

いというのが、実感らしい。もちろん、人骨は出土するのだが、トレンチのなかに入っ
て見た私も、意外に少ないという印象を持った。土と小石のなかにまばらにあるだけ
なのだ。

その理由は、すでに述べた様に、落城前にも絶え間ない「落人」があつたことと、
落城時には、諸大名軍による大規模な人狩りが行われた形跡があることにもよるだろ
う。このことは、キリシタン一揆Ⅱ殲滅路線を推し進めようとする幕府上使松平信綱
と、従来からの戦の常道から脱却できない諸大名との違いを鮮やかに示している。そ
れと同時に、悲惨な現実はたしかにあつたのだが、しかし、そのようななかでも、さ
まざまなかたちで生き延びた人たちがいたということも、私たちに告げているのでは
ないか。

つまり、誰よりも、家光Ⅱ幕府が、この「乱」は「キリシタン一揆」であり、それ
故に「殲滅」した、という「言説」を必要としていたのだった。「劇場としての政治」
は今に始まつたことではない、とも言えるだろう。そして、その後は、その枠組みの
なかで、くりかえしこの「乱」が語り継がれることになる。私たち現代人もその枠組
みから自由ではない。

言説と実態との間から見えるもの

その枠組み、つまり、「言説」から解放された時に見えてくるものは何だろうか。まず、多面体としての事実（史実）であり、多様な意図を持って関わる人々の群像だろう。「乱」の場合で言えば、幕府と諸藩、四郎一派と反対派、それに村人たち、「一旗組」の牢人たち、オランダ人・唐人・マカオのポルトガル人……がそれぞれに思惑と意図を持って関わっている。権力側も、一揆勢と同様に、一枚岩ではなかっただろう。それはある混沌でもあり、それに偶然が重なって、事柄は進んでいく。それにある形、方向性を与えるものは、結局はそれに関わる人々のイメージや意思、それによって形作られるもの、つまり、言説ではなからうか。したがって言説は、多様であり、あるいは無数ですらありうるが、「乱」については、幕府による言説が長く主導的な地位を占めていたと言わざるをえないのかも知れない。

しかし、それを剥ぎ取ってより実態に迫る努力をした時に見えてくるのは何か。その後二百年あまり続く、日本と東アジアの平和の礎となった人々（一揆勢）の姿であり、それこそが、それぞれの路線の違いを超えて、「乱」に立ち上がった人たちが共通し

て望んだことだったのでないか。そして、そのような彼らの戦いを基盤から支えたのが南有明海域という地域ではなからうか。

参考文献

- 鶴田倉造編『原史料で綴る天草島原の乱』（本渡市、一九九四年）
朝尾直弘『日本の歴史17 鎖国』（小学館、一九七五年）
荒野泰典『近世日本と東アジア』（東京大学出版会、一九八八年）
同『がれうた』について、『歴史と地理』五二二号（山川出版社、一九九九年）
同『江戸幕府と東アジア』、『日本の時代史14 江戸幕府と東アジア』（吉川弘文館、二〇〇三年）
荒野泰典編『一九九六年度立教大学日本史実習近世班報告書 有明海域世界の叛乱——「島原天草の乱」を
読みかっ歩く（一）』（荒野ゼミ私家版、一九九八年）
同編『一九九七年度立教大学日本史実習近世班報告書 南有明海域世界の叛乱——「島原・天草の乱」を読み、
かっ歩く（二）』（荒野ゼミ私家版、一九九九年）
石井進・服部英雄編『原城発掘——西海の王土から殉教の舞台へ』（新人物往来社、二〇〇〇年）
伊東多三郎『近世に於ける思想の形態と耶穌教の形成（一）・（二）』（『歴史学研究』17・18、一九三五年（後）
『近世史の研究』1、吉川弘文館、一九八一年に収録）
岩生成一『日本の歴史14 鎖国』（中公文庫、一九七四年、オリジナルは一九六六年）
上原兼善『幕藩制形成期の琉球支配』（吉川弘文館、二〇〇一年）
海老沢有道『天草四郎』（新人物往来社、一九六七年）
大橋幸泰『キリシタン民衆史の研究』（東京堂出版、二〇〇一年）
高木昭作『幕藩体制（一）』（『日本歴史体系』3（山川出版社、一九八八年）

鶴田文史「西海の乱と天草四郎」(葦書房、一九九〇年)

永積洋子「平戸オランダ商館日記」『平戸オランダ商館イギリス商館日記——碧眼のみた近世の日本と鎖国への道』(そして、一九八一一年)

中村質「島原の乱と鎖国」『岩波講座日本歴史9 近世1』(岩波書店、一九七五年)

福田剛「天草・島原とキリシタンの構造」一九九七年度立教大学文学研究科(史学) 修士論文

藤井譲治「一七世紀の日本——武家の国家の形成」『岩波講座日本通史巻1 近世2』(岩波書店、一九九二年)

藤木久志「戦国の村を行く」(朝日新聞社、一九九七年)

藤田覚「寛永飢饉と幕政(1)・(2)」『歴史』五九・六〇、一九八二・一九八三年

藤野保「島原一揆と農民問題」『日本近世史論考』(朝倉書房、一九九五年)

宮崎克則「大名権力と走り者の研究」(校倉書房、一九九五年)

山本博文「寛永時代」(吉川弘文館、一九八九年)

同「鎖国と海禁の時代」(校倉書房、一九九五年)

吉田伸之「近世都市社会の身分構造」(東京大学出版会、一九九八年)

* 「乱」の歴史的意義とその歴史的背景については、荒野泰典「江戸幕府と東アジア」(『日本の時代史14 江戸幕府と東アジア』吉川弘文館、二〇〇三年)を参照していただければ幸いです。